座談会

学会を構想・実現・運営するということ

『Antitled』創刊3周年を迎えて

『Antitled』は今号で 3 号を迎えることができました。研究大会も本年 9 月に第 3 回目を開催予定です。そこで、早いながらもひとつの区切りとして、編集兼運営委員でこれまでのことを振り返る座談会を行ないました。
これまで十分に伝えきれていなかった本誌のコンセプトに加えて、学会およびオンラインジャーナルを創るにあたってのアイディア、なるべく手間暇かけずに運営する工夫など、委員が座談会形式で語ります。

実施日：2024 年 3 月 5 日

参加者（50音順）

・猪原透（いのはら・とおる）
日本学術振興会特別研究員 RPD。専門は近代日本思想史。主に明治・大正期の社会学者や法学者の思想に関する研究を行っている。

・河原梓水（かわはら・あずみ）
福岡女子大学国際文理学部准教授。専門は戦後日本の性文化史、雑誌研究。特に、周縁的セクシュアリティの当事者が集った投稿雑誌『奇譚クラブ』に掲載されたポルノ小説・告白手記を史料として、サディズム・マゾヒズム・SM について研究している。日本古代史出身。

・田中誠（たなか・まこと）
四天王寺大学社会学部講師。専門は日本中世史。特に南北朝・室町期の訴訟制度・その担い手である奉行人について、幕府内の諸制度や人員構成、文書管理など様々な角度からの研究を行っている。

・寺澤優（てらざわ・ゆう）
日本学術振興会特別研究員 RPD。専門は近現代日本の性風俗史。特に戦前の私娼街（酌婦・カフェー女給・芸妓）について研究しており、最近は特に玉ノ井の私娼街をフィールドとしている。

・眞杉侑里（ますぎ・ゆり）
東義大学校人文社会科学日本学科助教授。専門は日本近代史の買売春関係。各地域の売春営業の実態について研究をしている。個別地域の売春実態を踏まえて近代日本全体の動向を明らかにするのが目標。

目次

1.『Antitled』創刊と友の会結成まで
はじまりは飲み会
「アンチ学際」というスローガン
2.『Antitled』はどんな雑誌か
立命館問題
「アンチ学際」だけど、学際的
文字数制限と史料紹介
査読体制
3.大会の開催と運営の工夫
開催の経緯
コーヒーブレイクと選べる報告時間
子連れ参加のためのアイディア①
—休憩室の設置と中継
子連れ参加のためのアイディア②
—平日に開催してみる
バリアフリーにあえて言及
第2回大会は大盛況、課題も
4. 活動資金と運営体制
会費を運営資金にしない
メインは Line グループ
SNS の使い方
5. 今後の展望
表紙は 12 年分ある
もっと異分野交流を

1.『Antitled』創刊と友の会結成まで

はじまりは飲み会

河原:『Antitled』編集委員は全部で 6 人、これに若干名を加えた大会運営委員がいますが、編集委員の 6 人がコアメンバーです。同じ時期に立命館大学大学院に在籍していた、現在 30 代後半から 40 歳くらいまでの人員で構成されています。

始まりは 2021 年 7 月の、京都での飲み会でした。みんなどんな気持ちで『Antitled』の創刊メンバーに参加したのでしょうか？

田中:飲み会には、僕と、猪原、河原、許(智香)が参加してました。たしか、就職のためには、業績作らないといけないねって話になって。で、誰かが私たちの論文は査読付雑誌に載らないよね、みたいなことを言い始めたのが始まりだよね。

河原:多分私ですね、それは。『日本史研究』[1]とかに絶対載らないもんね、という話になりましたね。このあたりは日本史学ではない人にはわかりにくいと思うんですが、日本史業界はかなり保守的で、まあ哲学よりはましだけど、性売買とか従軍慰安婦関係を除くと、セクシュアリティ研究はまだやる人が非常に少ない状態。ジェンダー研究はようやく定着してきましたが、SM なんてとんでもねえ、って感じです。SM は女性蔑視的なものだと思ってる研究者も多いので、女性史・ジェンダー史系の雑誌も厳しい。なので私の論文は紀要ばっかりです(笑)。

まあ、私以外の皆さんは、ぜんぜん著名雑誌に論文を載せることはできると思うし、寺澤さんなんかは載せているわけですが、寺澤さん、眞杉さんあたりは、かなり学界潮流に寄せて「細工」を施さないといけませんよね。かなしいですが、「ふつう」に書けば「ふつう」に載る研究テーマと、そうじゃない研究テーマがあると思います。寺澤さんとかどうですか？

寺澤:私は最初の飲み会には参加してなかったんですよ。広島にいたので。で、多分メールをもらいました。こういうコンセプトで雑誌を立ち上げるので、よかったら参加してくださいって言ってもらって。

その頃私自身も、雑誌に投稿する時に、自分が論文に入れたいものと、要求されるもののズレがちょこちょこあるなと感じていて。自分がどうしても言いたいのに落とさなきゃいけないことが結構ありました。そういう自分の葛藤みたいなのを抱えてた時期だったので、そういうことも載せられるような雑誌ができるんだったら、大変だろうけど、せっかくだから参加してみようかなっていう感じで参加しました。

[1] 日本史学界において、権威があるとされる雑誌のひとつ。そのほか、採択の倍率が高いとされる雑誌に、『歴史学研究』、『史学雑誌』がある。

河原：入れたいものと要求されるもののズレっていうのは、具体的にはどんなものなんですか？

寺澤：日本史学界におけるセクシュアリティ研究はほとんどが性売買における搾取の問題に焦点化しがちなので、それ以外の議論をしようと思うと、それを研究する意義をはじめに長々と書かなくてはいけないことがあります。それでも保守的な層には受け入れられにくいし、限られたページの中でできる議論が少なくなる。そうすると、議論が発展しにくいところにもどかしさを感じています。すごく細かいことなんですけど、例えば花街の業者の某氏は、この時こういうことを考えていたんじゃないか、とか。例えば中央の政治家だったら許されそうな、人物視点の細かい考察をしようとしても、花街業者だと微妙な扱いになる。

河原：それもダメなんだ。確かに政治家と花街業者は同列には扱えないだろうけど、花街業者が当時どんなことを考えて営業していたのかとか、重要そうな感じがするのに　　。

寺澤：ダメというか、ストーリーを議論しても、先行研究と絡ませなきゃいけないっていう時に、紙幅が決まってる中で、花街業者個々の動向や議論に焦点を当てていると、内容面での先行研究批判やこれまでの研究と関連した議論がしづらくなるので、そこに紙幅を割けない。結果的に私個人が重要だと思っているような細かい部分はカットしないといけなくなりがちです。

河原：眞杉さんはどうですか？

眞杉：私個人は、わりと好き勝手書いているタイプだと思うので（笑）、そこは寺澤さんと悩みが違うのかなとは思います。研究手法としては相当細かく見ていく方が得意。人がやらなさそうだから物量で押し切ろうというタイプだと勝手に自認してるんです。テクニカルな部分では日本史学らしいことを自分ではやってると思うけど、研究報告すると、**「この研究は何のジャンルなの？」みたいなことを毎度言われる**。これは個人的に相当不本意ですよね。

田中：どんなジャンルって答えるの？

眞杉：**いや、日本史ですけどって（笑）。**そういう意味ではストレスをかかえているんです。だから、日本史の領域を拡大していこうという『Antitled』のコンセプトがすごく響いたというか。
一般的な近現代史には多分猪原くんが一番近い気がするんですけど、猪原くん的にはどうなんですか？

猪原：私から見ると、眞杉さんはジャンルとしては地域史で、細部の面白さに徹底してこだわり抜くところに良さがあるのかなという気がしているんです。私もあまり細部を落としたくないタイプで、そういう研究スタイルに固まってきたのが大体 2020 年ぐらい。ちょうど『Antitled』が始まる少し前ぐらいです。細部まで突き詰めた研究を自分では面白いと思ってるのですけど、それを発表する場というのは、確かにそうあるわけではないと思ったんです。
もちろん、狭い意味での思想史の雑誌にも出すし、そこで論文が時々載ったりもしていたんですけど、同じ雑誌にばかり出し続けるのも良くないし。思想史の雑誌は文字数の制限も厳しいから、寺澤さんみたいに、こだわりのある部分をこそ落とさなきゃいけないっていうパターンも結構経験するんですよ。なので、文字数の制限が緩くて、いくらでもその対象人物の細かい話を書けるような雑誌が欲しいなという気持ちはあったんですね。そんな中で『Antitled』が始まったんで、これはちょうどいい雑誌だと。それで楽しく書いたっていうのが出発点。

河原：というか、ちょうどいい雑誌として創った、ということですよね。ただ、今出ている不満は、一人前の研究者ならちゃんと内容を刈り込めよ、という批判を想定すべきなのと、紀要に投稿すれば解決できる不満にも聞こえてしまいます。それだけにとどまらない『Antitled』の意義として、「アンチ学際」というコンセプト、というかスローガンがあるのかなと思います。

猪原：自由に書ける雑誌が欲しいと言う気持ちに、「アンチ学際」っていうスローガンがのっかってきたことで、方向性が決まってきたというか。

河原：「アンチ学際」はいちおう最初の飲み会でも出ていたとは思うんです。眞杉さんが「何のジャンルなの？」と聞

かれるのと似ている話ですが、私の場合は、SM 研究を**「普通」の日本史の研究じゃない、という意味で「学際的ですね」って言われることが多い**のだが、それにもやもやするんだっていう話をした記憶がある。あと、ジェンダー研究と言われることも多いのだけど、個人的にはジェンダーではなくセクシュアリティ研究をしているつもり。ただちょっと一旦それは置いといて、まだ参加の動機を聞いてない田中くんに聞きましょう。田中くんはこのメンバーの中で最も「普通」の、「正統」歴史学者ですが、そんな研究者に本会に参加したメリットはあったのでしょうか？（笑）

田中：最初の飲み会にいたから（笑）、わりと軽い気持ちで入ったというのはあります。研究分野としても、寺澤さんのような悩みは抱えてなくて、ここでいう「従来から「正統」とみなされてきた」研究だと思います。論文を投稿する時に、「細工」しなきゃいけなかったこともないですし。ただ、**「周縁的研究」の研究者だけの会だと、異端者の集団ってことになって、それは多分よくない**ですよね。「正統」研究者からしたら無視すればいいだけになってしまう。だから創刊号の巻頭言にも、「正統」研究も歓迎しますよと書いているわけで、じゃあ僕がいたっていいんじゃないの？と思ったわけです。実際、第 1 回大会の「注釈者の奇妙な奮闘――中世武家官僚の学知と「御成敗式目」」パネルや、第 2 号掲載論文[2]にもつながりましたから、入ってよかったなと思っています。ここで話をした式目注釈を研究しようと思ったら、やはり「学際的」な知識が必要ですし、それを発表するいい機会になったと思っています。

河原：第 2 回大会は、それこそ「正統」研究してる研究者がたくさん申し込んでくれましたが、それは友の会が異端者集団ではなく、田中くんのような「正統」研究者もメンバーにいるからっていうのは大きいと思いますね。

田中：あと、スケジュール的にこの学会は参加できそうというのも大きかったですね。D2（2012 年）で子供が生まれてから学会に行きにくくなって、毎月開催される部会等からは足がかなり遠のいていたんです[3]。そのうち部会も世代交代して参加者が年下ばっかりになっちゃって、より参加しづらい雰囲気に。普段参加してないと発表も申し込みづらいというか。でも Antitled 友の会の運営は、雑誌だけ作りましょ、2 年目からは年 1 回大会やりましょっていうペースでしたし、打ち合わせはほぼ全部オンラインだし、違う時代の人やテーマを勉強するにしても無理のない範囲でやれそうというのも実は大きかったんですよ。

猪原：うちは極力省エネで運営しようとしてますしね（「4. 活動資金・運営にかかる作業のこと」を参照）。

「アンチ学際」というスローガン

河原：省エネ運営と同時に、正規職についてる者が主に雑務を担う、という方針にしていますね。就職の妨げになったら元も子もないので。雑誌の立ち上げ段階で専任教員だったのは私だけだったので、それで初発の企画書のようなものは私が作ることになりました。で、飲み会での愚痴から始まってはいるが、どうせやるならちゃんとしたものにしたいので、まあ、真面目に雑誌の意義を考えたわけです。「アンチ学際」というスローガンそのものについては、創刊号の「巻頭言」[4]をお読みいただくとして、この巻頭言に至った背景について少し補足をさせてもらえればと思います。

ちょっと長くなるんですけど。『Antitled』は「アンチ学際」、従来「周縁」的とみなされがちであった研究をあえて「正統」歴史研究として掲載するというコンセプトですが、私はそもそも、SM 研究の師匠は哲学者だし、SM 研究を始めた 2000 年代後半くらいには、当然これは日本史学ではできないから、日本史とはお別れして、社会学とかに入門しなきゃいけないんだろうな、って思ってたんですよ。セクシュアリティ研究ができるのは社会学っていう思い込みが当時の私にもあって。これも日本史学以外の人にはわかりにくいと思うんですけど、とにかく

---

[2]田中誠「斎藤唯浄の『御成敗式目』注釈と幕府奉行人の学問」 https://kihtty.org/wp-content/uploads/2023/03/an02_04_35-62.pdf

[3] 日本史研究会中世史部会のこと。京都に所在する日本史研究会（『日本史研究』を発行）は古代・中世・近世・近現代ごとに部会があり、月に 2 回部会が開かれている。

[4] 編集委員一同「巻頭言 『Antitled』創刊にあたって」 https://kihtty.files.wordpress.com/2022/03/an01_03_03-04-2.pdf

日本史ではセクシュアリティ研究は無理、っていうのは、当時自明の前提だったんです。
なので、しょうがないから異分野のいろんな学会に行ってみたり雑誌読んだりして、なんや、社会学って歴史学と問題意識から何から全く違うやん、こんな違う分野に転向するの不可能すぎる、と感じて社会学をやる選択肢はなくなりました。文学はすごく楽しそうだったけど、やっぱり完全に私のやりたいこととマッチするわけではなくて。このあたりで、そもそも史料があって、実証主義歴史学の研究方法で十分分析できるのに、歴史学になる研究対象とならない対象があるっておかしくない？という当然の疑問がやっとでてきます（笑）。ただ、この頃には他の分野を知る事でなんとなく気分が自由になっていたので、別に看板はどうでもいいやって感じで、長い間自分が何のジャンルになるのかは特に気にしていなかったんですね。私は論文を載せる媒体に特にこだわりがないので、日本史の有名雑誌に論文が載らなくても個人的には特に困ってなかったんです。
ただ、だんだんと、現在の日本のセクシュアリティ研究は歴史的視点をあまり重視しないっていう状況がわかってきました。とくに性的マイノリティ研究は、現在困っている人をなんとかしようという問題意識が強くて、過去は二の次って感じに歴史系の人間からは見えるんですよね。「LGBT」関係の研究は超増えているのに、歴史的な研究はとても少ない。あんまり興味もないから、米国の性的マイノリティの歴史をそのまま現在の日本の状況に接続しちゃうような、危うい前提もかなり見かける。
さらに、ちょっと前に、とある性的マイノリティ関係の歴史史料群が、所蔵者の体調不良によって散逸しそうになるっていう出来事があって。その性的マイノリティに関する研究者は社会学や人類学にけっこういるのに、ほとんどの人が散逸をそれほど気に留めてなくって、目立ったアクションは起きなかったんです。最終的にはなんとかなったんですけど、これにけっこう衝撃を受けたんですよ。ここでこれらのまとまった史料が失われたら、もう日本でこの人たちがどんなふうに生きて来たのか、知る術がなくなるかもしれないのに。いいのかそれで、と。
でもよくよく考えたら、史料の重要性を訴えたり保全したりするのは本来歴史学者の役割ですよね。とすると、この件は日本の性的マイノリティを研究する歴史学者が全然いないせいで、音頭を取る人が出てこず、結果起こっているとも捉えられる。つまり社会学者や人類学者は全然悪くなくて、悪いのは歴史学者、っていうか日本史学界ということになるんじゃないかと思ったんです。そもそもなぜ性的マイノリティを研究する日本史学者がほとんどいないかというと、それは明らかに日本史学界がこの方面の研究を「まともな研究」の範疇に入れず、日本史学として扱ってこなかったことが影響してると思うんですね。
最近は『歴史評論』や『歴史学研究』でジェンダーやクィア史特集が組まれることが出てきましたけど、第 1 回大会前にちょっと調べたら、『史学雑誌』・『日本史研究』に掲載された投稿論文で、「ジェンダー」がタイトルに含まれる論文ですらいまだゼロだったんですよ（検索上）。ちょっと愕然としましたね。『ジェンダー史学』とか専門誌はあるけど、じゃあ『鎌倉遺文研究』があるからって鎌倉時代の論文がこれらの雑誌に載ってないわけではないので。
こんな状況なので、私が昔、SM 研究するなら社会学に行かなきゃ、って思ったのと同じように、本当は歴史的にセクシュアリティ研究をしたい人がいても、日本史では無理だから別の分野に行っちゃう、あるいは研究テーマを変えちゃう、みたいなことが起きてるんじゃないのかなと。これはけっこう深刻な問題なんだと考えるようになりました。
それで、私は、自分が歴史学者であって、私の研究も歴史研究なんだぞって対外的に主張してかないといけないんだ、と思うようになった。本当は、分野はどうでもいいし、正直そんなにちゃんとした歴史学者である自信はまったく無いんですけど。日本史学でもセクシュアリティ研究できるんだーって空気にして後進を増やすために歴史学者だと「僭称」することにしたわけです（笑）。このように、日本史学の範囲内で、セクシュアリティ研究をやるっていう態度を表明することが極めて重要なので、学問領域にこだわりたいと思って「アンチ学際」がいいかなと考えました。『Antitled』創刊号に載せた「巻頭言」の草稿は、8 月には大体できていたかな。

猪原：当時の記録によると、7 月 31 日に企画案が完成していて、この時点では『Untitled』というタイトルでした。寺澤さんの発案で。そのあと、わりと急ピッチで進んで、8 月に眞杉さんを誘って、ついでに投稿の依頼もし、11 月には創刊号告知・原稿募集のチラシを作って参加している研究会などで配布しています。

寺澤：そうでした。最初はなかなかジャーナルの名前が決まらなくて、とりあえず暫定的に「名称未定」という意味で、「Untitled」にしていたんですよね。それをみんなが略して「アンタイ」と呼んでいたんですが、英語ではアンチの意味の「Anti-」の発音が「アンタイ」なので、コンセプトの「アンチ学際」と絡められないかな？と思ったんです。そして、「titled」って英語で肩書・称号を持っている人という意味もあるし、「Anti +titled」で「アンチ既存の権威」という意味を込められるかな？と思って提案しました。そうしたら、それでいこうってことになったんですよね。

河原：いいタイトルを考えてくれて助かりました、ほんとに。私何も思いつかなくて、昔の SM 雑誌の名前とか出してたもん。『サン＆ムーン』とか『異喜・域』とか。
団体名のほうもなかなか決まらなくて。皆が疲れてきたころに、猪原くんが、「友の会とかどうですか？「ソビエト友の会」とかもあるし」、って言ったのでもうそれでいこう、ってなりました。「ソビエト友の会」があるからっていう理由は今思い返すとまったく意味不明だけど。

猪原：団体名なんて雑誌の奥付けに書くときくらいしか使わないだろう……という安易な気持ちで「友の会」を提案したのですが、大会も「友の会研究大会」だし、思いのほか色々なところで使うことになりましたね。提案したときは全員が「タカシマヤ友の会」を連想したので、むきになって「ソビエト友の会」を引き合いに出して「由緒のある名前だ」と強弁しましたが、実際は単なる思いつきです（笑）

2.『Antitled』はどんな雑誌か

立命館問題

眞杉：『Antitled』編集委員は立命館大学出身者で構成されてるじゃないですか。なので、立命館の人しか大会で発表できないの？雑誌に書けないの？とか時々聞かれるんですよ。そうじゃないということを強調しておいたほうが。

猪原：元々の研究会を始める出発点になったのは、やっぱり立命館の若手同士で協力し合いながら研究を進めていきましょうと。また業績を発表する場も作っていきましょうと。だからといって、**立命館の人間の論文しか載せないよっていう考え方は元々していない**。創刊号の時点でも田尻健太さんに書いてもらっているし。田尻さん、立命館じゃないですよね？

河原：京都大学ですね。京大だけどちょうどコロナの影響で地元の九州にいらっしゃったので、投稿をお願いしてみました。あと、田尻さんは日本史ではなくて東洋史。私たちが日本史出身だから偏りがちで難しいのですが、理念としては分野を日本にも限定はしていないです。

猪原：創刊号の時点でもそうやって立命館以外の人にも書いてもらっているし、第 2 号、第 3 号以降になってくるとむしろ立命館の比率がどんどん下がっていって、半分から 3 分の 1 ぐらいになってるんじゃないですかね。

田中：第 2 号の吉川さんも立命ではなくて、ガチ投稿だし。

猪原：しかも大変な力作でした。

田中：第 3 号の杉谷さん、三橋さんもそう。実際かなり立命の比率は下がりましたね。ちなみに辻さんは立命館の教員なので立命仲間に見えるかもしれないんですが、まったく依頼とかはしていなくて、単にうちの趣旨に共感してくれてのガチ投稿です。

猪原：『Antitled』は、雑誌のカラーというか、こういう論文が欲しいってのがわりあいはっきりしているじゃないですか。それで、どういう**論文を求めているかということを示す上では、編集委員が書くのが一番手っ取り早い**んですよね。

河原：日本史の学会誌って本来はわりとサークル誌みたいなものだと思うんですよ。『続日本紀研究』とか『日本史研究』の最初期の号とかみてるとそんな感じ。やっぱり雑誌を創った人たちが自ら率先して書くものだと思います。自分が書きたいことがあって創るんだから当たり前とも言えますけど。ただ、もちろん最初のメンバーを優遇して他の人を落とすとか、そういうことはしません。どんな方でも投稿お待ちしています！

「アンチ学際」だけど、学際的

猪原：どういう人が雑誌に投稿してくるかということを考える段階でも、狭義の歴史学者だけじゃなくて、社会学者などが投稿してくる可能性というのも、検討していた気がします。「アンチ学際」と言われた時に、おそらく少なからぬ人が、歴史学至上主義で歴史学の論文しか乗らないんだという風に勘違いするんだと思うのですが、それは意図しているところではないですよね。

河原：**社会学者大歓迎よ！**私や眞杉さんが入っている性慾研究会というところは、社会学者や文学研究者がいっぱいいて、歴史研究やってるんですよ。史料解釈はやっぱり歴史学者に分があるけど、社会学者は細かい話を延々しがちな歴史学者の研究内容を構造的に整理してくれたり、理論的な研究潮流を教えてくれたりして助かりますよ。文学研究者からは小説の研究方法の常識を教えてもらえるし。

寺澤：だから**「歴史学」じゃなくて「歴史研究」**って書き方にしようって話になりましたよね。

田中：「アンチ学際」だけど、学際的。

河原：学際性というほどのことかはわかりませんけど、他分野についても勉強していることは基本的には当然いいことですよね。うちの「アンチ学際」は、他分野を無視しようというわけではなくて、日本史業界とか歴史学業界を拡大しようという試みなので。そういえば、いわゆるプロジェクト型共同研究を発表できる場所ってあまり日本史にはないかなという気がして、そういう場を作るとなると、やっぱり既存の学会では難しいので、うちでできたらなーって無意識に思っていたかも。
史料はやっぱり、どんな分野にしろちゃんと読んでほしいけど、それ以外の部分ではいろいろな分野で助け合って、おもしろい論文ができればよし、っていうことですよね。
…やっぱり「アンチ学際」じゃない方がいいかな？

猪原：今更その看板を下ろすのももったいないですよ。

文字数制限と史料紹介

猪原：オンラインジャーナルという利点を生かして、文字数制限をゆるくしているので、創刊号から、細部の面白さを重視するような論文が割と多く並んでる感じはします。

田中：36000 字（原稿用紙 90 枚換算）上限にしたけど、「図表を含まず」にしたからね。史料紹介は字数無制限だし。

河原：みんな史料いっぱい引用したいと言う気持ちがあるから…。私もけっこう書いちゃったな。そういえば猪原くん、さっき思想史の雑誌は文字数の制限も厳しいって言ってたけど、文字数いくらまでなの？

猪原：2 万字ぐらいです。400 字詰め原稿で 50 枚以内、みたいな場合だと、もう少し短くなります。[5]

河原：……みなさん！日本史以外の学会誌は普通 2 万字なんですよ！社会学も 2 万字、文学も 2 万字。しかも「程度」じゃなくて「上限」です[6]。日本史はね、書きすぎなんですよ！（笑）。

眞杉：そうなんなんですか。でも、史料引用が宿命だから、長くても許されているってことでしょうか。

河原：たぶん…。みんな引用史料の部分を読みたいわけだし。ただ、他分野と単純に文字数で比較すると、すごく多いってこと。私はジェンダーとか、カルチュラルスタディーズとか、文学とかの雑誌にこれまで投稿してきたんですけど、このへんの雑誌は絶対 2 万字上限なんですよ。最初はきつかったけど今は慣れて、むしろ長い論文読むのちょっとしんどい…創刊号では自分も結構長く書いておいてなんですが。

眞杉：引用史料といえば、第 3 号では、三橋さんの史料紹介が図版いっぱいで長大ですが、オンラインジャーナルの強みが生かせた感じですね。写真もカラーで載せられて。

---

[5] 日本史学の学術雑誌では、論文の文字数規定は原稿用紙 90 枚（36000 字）程度であることが多い（ただし、『日本歴史』は 50 枚）。50 枚（20000 字）以下の場合は「研究ノート」になるという噂がある。

[6] 投稿規定に「程度」とある場合は、一割程度の文字数は超過してもよい、という噂がある。

河原：せっかく印刷代がかからないのだから、史料紹介に力を入れたいと私なんかは最初から思っていたんですが、3 号でかなりそれが実現しましたね。

猪原：確かに史料紹介は創刊号・第 2 号ではそれほど多くは載らなかったですけど、当初から力を入れたいと思っていた分野ではありましたよね。特に文字数の制限をどうするかは結構議論した気がします。結局、文字数制限も要相談というぐらいに緩く決めて、書きたいと思えばいくらでも書けるような形になったわけです。

田中：まだ投稿はこないけど、ブログ記事とか掲示板のログとか、そんなものも史料としては想定してますね。ほっとくと消えるかもしれないものって現代にたくさんあるので、こちらに掲載しておけば保存できますよ、というような気持ちで。後世で何が役に立つかわからないから、基本何でもかんでも載せておきたい。

河原：ただ、実は『Antitled』は保存用と、ネット不使用の人のために（実在する）、印刷して冊子にもしていて。あまりに増ページすると印刷代が高騰するのでどうしよう、という問題があって、ただいま議論中です。

寺澤：紙冊子、大会で無料配布してますけど、毎回全部はけているので、紙冊子の需要って実際にはあるみたいなんですよね。

田中：データだけでの保管は不安が残るので紙冊子は絶対必要。紙なら、ちゃんと保管すれば千年くらい残る。

査読体制

河原：大会に来てくれた人から聞いたんだけど、前号に投稿してくれた人から、「すごく丁寧な査読してくれるよ」って聞いてうちに興味持ってくれたんだって。

猪原：そうでしたか。査読が売りにできるかもしれない（笑）

河原：私たちわりと査読がんばってるよね。

猪原：がんばってると思います。編集委員の数が少ないので、常識的に考えればあまり幅広い分野の投稿には対応できないはずなんだけど。なんとなく上手くいっている感じはしますね。

河原：それはたぶん、投稿時に外部査読の希望者（いれば）を申告してもらってるからですね。

猪原 ：その方式は、確かに今のところ破綻なくできている理由の 1 つだろうとは思います。

田中：もちろん全員が希望者を書くわけではないけど、今のところ、日本史分野で編集委員がいないのは近世史だけだから、それ以外はなんとなく査読の依頼をかけられる。

眞杉：あれもよその学会を参照して作りましたね。利益相反関係にあるので査読者にしてほしくない研究者、逆に希望する研究者を書くことは海外のジャーナルだとけっこうみかけるので。

河原：そもそも『Antitled』を査読誌にしたのは、業績にするには査読雑誌のほうがいいよね、というのもあるんですけど、それは些末なことで。第2号の編集後記にも書いたのですが[7]、私みたいな先行研究があまりない分野をやっていると、査読で有益なコメントを貰える確率が「正統」研究より相対的に低いんですよ。このことはこれまで私自身がけっこう悲しかったところです。なので、『Antitled』では、既存の評価軸ではなんだかよくわからないものでも、極力投稿者のやりたい方向でブラッシュアップできるようなピアレビューをしたいと思っています。外部査読はそこまで厳密にこの方針に沿ってくれとお願いしているわけではないですが、一般的評価もわかったほうがいいので、これはこれでいいのかなと。

猪原：査読者の方にもその辺りの問題意識をお伝えしているので、どの方からも建設的な査読コメントをいただいています。ちょっと査読に時間かけすぎというか、こんな

[7] 河原梓水「編集後記」https://kihtty.org/wp-content/uploads/2023/03/an02_08_107.pdf

に細かくやっていいんだろうかと思うぐらいやってるとは思います。
自分の話なので言いますけれども、創刊号掲載の拙稿は、結局 3 回ぐらい全面的な書き直しを要請された気がします[8]。今、パソコンには第 4 稿まで入ってるんですけど(笑)、結構大幅な書き直しを、2 回か 3 回ぐらいはしたと思います。それぐらい査読は厳しかったです。

河原:ごめんね(笑)。

猪原:創刊号は主に編集委員会の中で議論したんですけど、多分その創刊号に載る原稿のクオリティ如何でその後の方向性も大体決まってくるというような感覚はあったので、だいぶ厳しめの査読になったなという風に思います。

河原:そうですね。最初だから、舐められたらいかん、みたいな気持ちで。

猪原:そうそう。多分、**間口を広くしている分だけ、かえって実証の水準は厳しくする**んだっていうような認識が、編集委員の中には共有されていたのかなという気がします。

河原:私たちはわりと実証主義にのっとってしまっている面が強いというところもありますね。実証主義偏重には批判がずっとあるわけですが、さりとて実証が不十分だとやっぱり面白く読めない気がしてしまう。
どうしてもその辺は賛否があるわけですが。私たちは、というか今の日本史学はやっぱり歴史理論が弱いですよね。私たちもあんまり勉強できてないし、日本史学界全体でも、理論をやってる人はすごく少ない。理論をやりたい人がこれから出てくるなら、大いに歓迎というか、そんな研究も送ってくれれば我々も勉強するしぜひお願いしますって感じですよね。

猪原:そうですね。そこは多分当初から目指していたところではあるのだけれども、まだあまりできていない。

寺澤:ただ、今の少ない投稿数だからなんとか回ってるっていうところもあって、これが 5 本 10 本、毎年投稿が来るんだっていう風になると、ちょっとなんかシステムを見直さなきゃいけないのかもしれないですね。

河原:そうですね。体力がいつまで続くかっていうとこだね。ただ、今より投稿が増えても、たぶん普通の雑誌ぐらいの査読だったらできるかな、とは思います。今みたいに丁寧にはできなくなるだろうけどってことですね。ただ、やっぱり査読はちゃんとしてあげたいというか、ちゃんと読んであげたいなという気はしていますね。なかなか厳しいのですが。

猪原:もしくは編集委員の数を今の倍ぐらいに増やすか。

眞杉:編集委員は増やしたいですね。特に近世史専門の委員がいないし。

河原:これを読んで、やってもいいよという方がいたら、ぜひ委員の誰かにご一報いただきたいですね。

田中:なんか第 4 号も出せそうですよね。この感じだと。

猪原:そうですね。誰も投稿してこなかったら、編集員が書けばいいし。

寺澤:私、まだ論文を書いてないので、書きたいです。

田中:ぜひぜひ。寺澤さん以外は全員論文載せてるもんね。僕は次は史料紹介だな。なんか載せたいですよね。

河原:このように、委員が貪欲に論文を書こうとしていますけど、先ほどから強調しているように別に立命館関係者に特化した雑誌ではないですし、掲載論文数に制限もないので、ネタをお持ちの方は気軽にご投稿いただきたいです!

---

[8]猪原透「明治期の社会学と国際関係論——建部遯吾の対外観」https://kihtty.org/wp-content/uploads/2022/03/an01_06_59-82-2.pdf

3. 大会の開催と運営の工夫

開催の経緯

河原：『Antitled』創刊号を 2022 年 3 月に出した後、9 月に第 1 回研究大会をやりました[9]。
大会はめっちゃ楽しかったよね。なんかみんなやる気にあふれていて活気があって。質問もいっぱい出て。懇親会もすごくたくさんの人が参加してくれて。

田中：2022 年 9 月 9 日（金）、立命館大学衣笠キャンパスにて、結局 Zoom＆対面のハイブリッド開催になりました。対面の教室は満席で、ぎゅうぎゅうだったと思う。対面・Zoom あわせて計 86 名。従来にないタイプの研究の人も来てくれて、非常に良かったですね。

猪原：そもそも、なんで大会をやるって話になったんでしたっけ？

河原：猪原君が、大会があると、報告してくれた人が投稿するというサイクルを生み出せるのでいいと思うって言ったのでやることになりました。

猪原：いいました。たしかに。

河原：まあ、年に 1 回くらい集まって研究の話して酒飲むのはいいなと思ったよ。
あと、当時ちょうどコロナの影響で Zoom やウェビナーを使った大会がすごく増えてて。それを横目で見ていたわけですが、オンラインだと全然手間がかからないのでできるんじゃない？って思えたのがはじまりですかね。あとは、Zoom はともかく、ウェビナーでやれば 3 人ぐらいしか参加者がいなくても対外的にはバレないから（笑）、とりあえず大会つってやっとけ、と（笑）。それで本当に 3 人しか来なくても、研究会やったと思えば別に、年に 1 回ぐらい発表すること自体は全然いいじゃん、みたいな感じで気軽に始めたね。こんなこずるい考えで決めたのですが、結局、相当たくさんの人が来てくれることがわかったので、対面でもやることにして、オンラインではウェビナーではなくて Zoom でいいな、ってことに。

田中：X（旧 Twitter）とかでは、ちょこちょこ宣伝頑張ったからかな。

河原：宣伝の効果は大きかったかもだけど、パネル報告とかちゃんと企画したっていうのも大きいと思う。第 1 回は猪原くんと、西澤さんの個人報告。そして「御成敗式目」注釈のパネルと、遊郭のパネルをやったんですね。…これ、今見返してみても、めちゃくちゃちゃんとしてて面白そうだと思うんですよ！すごいわ。私たちちゃんと考えたもんね、やるとなったら。

田中：これも、最初の大会だからちゃんとやろうっていうって感じで。やっぱりそういう真面目さと努力が功を奏したと言っていいかな。

河原：最終的にはちゃんと大会と名乗っても問題ない規模・質になったのではないでしょうか。

コーヒーブレイクと選べる報告時間

河原：うちは、私と猪原くんが日本史研究会の研究委員、眞杉さん、寺澤さんも総務委員をしてたので、学会運営の知識と経験はあったんですよね。なのでわりと気軽に大会も開催できたというか。委員経験がないととても無理だったと思うので、この辺は既存の学会で育ててもらった成果ということになりますかね。

猪原：**大会を開催するのにどれくらいの手間と時間が必要か、という相場勘は委員の経験を通して身につけた**と思います。ただ、結果として日本史研などの大会とはだいぶ違ったやり方になりましたね。

田中：僕は学会の委員をやったことがなくて『Antitled』編集委員が初になります。なので、あまり先入観なく、これまでいろいろな学会を報告者や参加者として経験したなかで、これはよかったなというものをやってみてはどうかなと思って提案しているところがあります。
たとえば、うちの大会は報告の合間に「コーヒーブレイク」として、20 分くらいの、少し長めの休憩時間を入れてるんですが、これは国際学会でやってる方法を取り入

[9]「第1回研究大会プログラム」https://x.gd/kLpFk

れたんだよね。

河原：そうそう、これは明らかに EAJS[10]の大会がモデルです。私と寺澤さん、田中くんは参加したことがあって。

田中：個別報告やパネル報告の合間合間に長めのコーヒーブレイクがあるんですよ。で、本当に飲み物とお菓子を配っている。大会自体は 3 年に一度開催で、日本史に限らず日本学全体だからかなり大規模で、3 日ぐらいかけてやる。発表する会場が分野ごとに分かれているんよね。近代文学とか、歴史とか、映像文化とか、分野やテーマごとに分かれていて、同時進行でたくさん発表がある。小さい部屋に分かれて各人興味のある部屋にいって発表を聞くスタイル。ドイツで参加したドイツ語圏日本研究学会大会（Deutschsprachiger Japanologentag）でも、似たような形式だったね。我々の業界で大会っていうとイメージが日本史研・歴研などの大会共同研究報告じゃないですか[11]。あと史学会ぐらいかな。この辺とは全く違う学会方式。

河原：ほかの分野だと小部屋タイプの大会ってかなり一般的で、数十人から数百人報告者がいて、それぞれ小部屋に分かれて報告する大会もたくさんあるはずだけど、あまりこの方式は日本史ではなじみがないですよね。日本史では、1回の大会で報告者は全体でせいぜい 10 人ちょっとという感じでは。
共同研究報告は基本的に、人生で 1 回しかやらない大舞台じゃないですか。業績検討会やり、何回も準備報告やり、研究者人生前半の最大の山場って感じで。60～90 分報告して 2 時間討論とかだし。もう少しこう、最近思いついたネタについて意見を聞いてみたいとか、失敗してもやり直せる感じの、部会報告のような、人生をかけずにやれる学会報告が、全時代網羅した総合学会にあってもいいんじゃないかと思ったんですよね。

眞杉：うちは、**報告時間がバラバラっていうのが新しい**。

田中：報告時間が色々設定されてて選べるのがいいね、というのは結構いろんな人に言われます。これは特にモデルとなった学会はないです。
短い報告時間の大会は無いわけじゃなくて、例えば史学会や日本古文書学会の大会だと 20～30 分です。でもこれらは1日に 7 人とかぶっ通しでやったりするので、Antitled 大会で採用した形とは違うんですよね。

眞杉：ぶっ通し報告タイプだと、参加者同士の交流は懇親会でってことになる。

田中：そうそう。**コーヒーブレイクあると、懇親会来ない人とも喋れていい**。

河原 ：史学会は東京で遠いので、院生のころは発表申し込むっていう発想はなかったなあ。というかたぶん、学会発表して業績を作らなければっていう発想自体が空気としてまだそんなになかった（2000年代後半）。若手が研究発表をする場は、各地の研究会・部会という感じで、そうなるとやっぱり 60 分くらい。今戦後をやっているのに近現代史部会に行ったことがないもので、近現代の状況ってよく知らないんだけど（笑）、なにがありますか？

猪原：私の専門だと日本思想史学会ですけど。年 1 回大会があるぐらい。査読がちゃんとあって落ちる時は落ちます。

河原：報告時間はどれくらい？

猪原：短いんですよ。25 分ぐらい。だから思想史だと逆に長く話す場所が少ないですね。

眞杉：近現代だと大体みんな日韓次世代フォーラムとか、韓国日本近代学会とか。この辺も報告時間は 20 分で、短すぎてまとまらないっていう、毎度の悩みを抱えるのが定番な気がします。査読有の国際会議なのでありがたいですが。

河原：国際会議の標準時間はそれくらいなんだと思う。国

[10] European Association for Japanese Studies。3 年に 1 回、ヨーロッパで大会が開かれる。日本語での発表が認められているため、日本人研究者に人気。
[11] いくつかの学会では、会の下部組織である部会ごと報告者を立て、これを部会での「共同研究報告」と呼ぶ。「共同研究」とされるが報告者は一人で、内容も報告者単体の研究と見なされることが多く、論文化される際も単著となる。

内の日本史の学会は、システムが相当実用的というか、あんまり「業績稼ぎ」みたいな最近のニーズに馴染まない、昔ながらのスタイルをまだ続けてるってことでしょうかね。業績主義にそこまで汚染されていないというか。

田中：長めに喋って、長めに専門的な意見もらってっていうのが部会だったりするし。部会はやっぱりそういう風に機能してる。

河原：ちゃんと細かい史料解釈とかも検討してもらってね。それでいいんだけどね。うん、いいんだけど、それだと同じ時代の専門の人たちだけと付き合うことになっちゃうし。やっぱり学際的な場ではないからね。

田中：そうだよね。うちは「アンチ学際」でありかつ**他時代の人も一緒に聞けるような大会報告順にしたり**しているから、様々な角度からの意見をもらえるようになってますね。

河原：人間関係が限定されるとメンタルによくないから。まあ、専門の時代だけ聞いてあとは休憩室でコーヒー飲みながら専門的な議論してもまあいいですよ、とは思ってます。

田中：あと予稿集も、こんな風にネットにあげたりすることは多分日本史ではなかったと思う。

河原：いろんな学会のやりかたから、これ良いんじゃないの？っていうのを取り出して作ったという感じですね。学会文化は本当に分野でまったく違っているので、いろいろ参加すると気づきがあって面白いです。今後も柔軟に良いところを真似していきたいですね。

子連れ参加のためのアイディア①
——休憩室の設置と中継

河原：私たちは子持ちが多いので、子連れでも来やすい大会にしたいという思いは当然ありました。ただ、私たちにベビーシッターとかを用意する資金はないし、学会が用意したベビーシッターを使った経験もない。それで、子連れの対応として、会場のすぐ近くに休憩室みたいなのがあればいいんじゃない？という話になったんですよね。子供がぐずったら連れ出せて、何か食べさせたり遊ばせたりできるような。学会会場にそんなんがあればいいなーと前から思っていた（笑）。それで、休憩室を用意することにしたわけですが、せっかく休憩室作るんだったら、そこでコーヒーとか飲めたらいいよね、っていうことになって、そこに衣笠キャンパスにあるタリーズコーヒーからコーヒーをポットでとって設置して。もちろん緑茶とかも。

寺澤：上京組は土産のお菓子を置いたり。

河原：そうそう。2 年目は発表者がお菓子を差し入れしてくれたりして、茶菓子つまみながらわいわいやりましたね。

猪原：あと、休憩室で発表を中継しましたね。眞杉さんのご尽力によって。ハイブリッド開催だったので、Zoom 画面を映して。この辺はコロナ禍対応でみんな Zoom とかに慣れていたからこそできたことですよね。

田中：立命館の設備が良かったんですよ。カメラとスピーカーが非常に優れていました。

河原：現状、トラブルなく開催できているのは立命だからというわけですね。

田中：設備面は確実にある。逆に言えば、他の大学で開催するのがなかなか難しい。いつも立命開催じゃなくて、いろんなところで開催したい気持ちがあるけど、現状はちょっと難しいという話になっています。

猪原：休憩室で Zoom 画面を見れるようにすることの良さって、最初はよくわからなかったんですけど、実際に経験してみたら良さがよくわかりました。**報告会場に座って聞き続けるのがちょっと体力的に辛いなっていう時にも、コーヒー飲みながら気楽に聞ける**ので。これは確かにひとつの参加の形だなって思いました。

田中：良かったよね。もし定員オーバーしても、隣の部屋で聞けるしね。休憩室でも聞けると、子連れ参加で、会場から出ないといけなくなっても聞けるしね。

河原：たしか中継は、書籍展示を申し出てくださった琥珀

書房さんのブースを休憩室に設置したんだけど、ずっと休憩室で発表も聞けずぼっちなのがあまりにもいたたまれなくて始めた。わざわざ来てくれるのにずっと別室で放置じゃあんまりだなと思って。
でもやってみたら本当に様々なメリットがありましたよね。

子連れ参加のためのアイディア①
――平日に開催してみる

猪原：子連れ対策としては、平日の昼間開催というのもひとつの工夫ですよね。Antitled 大会は 9 月の第一金曜日にこれまで開催しています。

田中：土日の方がいいって人も多分いますけどね。

猪原：実は私の場合もそうなんです。研究者夫婦だったら間違いなく平日の方がいいと思います。でも、うちみたいな会社員と研究者の組み合わせだったら、会社員の方が土日休みなので子供の面倒をみてもらえるんですよ。平日だとむしろ保育園の送り迎えが入ってくるので難しかったりする。だから絶対この時にすべきだっていうのはないんですけれども。でも、多くの研究者にとっては平日の方が参加しやすいのは確かなんじゃないかなと思います。
ただそれでも、平日開催は院生や大学教員向けで、会社員をしながら研究している人はお断りなのかと反発する人も当然出てくるでしょうし。そう考えると、研究会大会はこの曜日にするのが正解だっていうのはないのだろうという風には思います。

河原：私は実はそれはよくわからなくて。勤め人はなんで土日のほうがいいのでしょう。一般企業で働いたことないがないから、あくまでも噂ですけど…「有給」ってものがあるんじゃないのですか？そもそも研究者だって裁量労働なだけで平日休みなわけじゃないし、勤め人だって子持ちだと土日は育児しないといけないのは一緒では…土日に学会行くとして、そのあいだの子供の面倒はどうするんでしょう？

眞杉：私、多分 1 回目の大会の時は普通の事務系職員としても働いてたので、有給取ったと思います。

河原：そういう感じでいけないものなのかなあ。あと、「社会人」は院生や専業研究者よりはるかに QOL を考えて生きており、週 2 日休むし有休も理由を告げずしっかり取ることが推奨されているという噂もあるけど、やっぱり絵に描いた餅なのかしら？

眞杉：どうなんですかね。 研究者で非常勤を持っていて週 2 とか 3 とか働いているタイプだと、いわゆる有給がほとんどないみたいなこともあるので、そういう意味で言うとちょっとハードルが高い人もいるかもしれない。

河原：その辺は、9 月は大学は夏休みだから授業はないはず、という前提にしたところですね。

田中：日にち問題は難しくて、日本史業界だと学芸員の方も重要になると思うんだけど、こっちは逆に土日難しいだろうなとか。あちらが立てればこちらが立たない。とにかくオンラインでも参加できるし、子連れもオッケーですよ、ということでご勘弁をってのが今の状況ですね。

河原：毎年決まっていれば休みも取りやすいかなと思って、現状、9 月の第1金曜日と、一応固定していますね。

田中：大会続けるなら隔年で土日にしてするという手もあると思いますが。試しにやってみてもいいけど。猪原くん、やりたいですか？

猪原：いや、あんまり（笑）。Antitled 友の会みたいな新興の学会は、他の学会とは違う曜日にやった方が、来てくれる人も増えそうですし。

河原：秋は学会が多いしね。あと、なんだかんだ平日でも勤め人の方結構来てくれたよね。

田中：大学事務の人とか、会社員とか。まあ素性は懇親会に来てくれた人しかわかりませんが。出版社の編集者の方がけっこう来てくれて、懇親会にも来てくれましたね。

河原：そう。そして第1回大会が終わった後に、**発表者に書籍出版の依頼がいっぱい来ましたね**、ありがたいことに。第 2 回も引き続き編集者の方が来て下さって、今年も

来て下さるって聞いているので、本を出したい若手研究者にもおすすめです！（笑）

バリアフリーにあえて言及

田中：バリアフリーは、会場の立命館がかなりちゃんとしてるので、オッケーという感じで。

河原：ただ、懇親会については、車椅子対応などが必要な場合は事前に教えてね、という自由記述欄を申し込みのGoogle フォームに設けました。本来はそういうことせずに、最初から当然バリアフリー会場を押さえて誰でも来れるようにした方がいいんです。それがあるべき姿。でもフォームに書いておけば、申し込む人たちが、学会ではバリアフリーもちゃんと考えなきゃいけないこと気づくかなと思って。

日本史の学会で身体障害者が参加する可能性を考えている学会には、私は今までほとんど巡り合ったことがなくて、問題だと思っていたんです（最近あまり学会に行ってないから改善しているかもしれない）。ジェンダーとかアカハラとか若手研究者問題は最近発言する人も増えてきましたが、障害者は置き去りのように思われました。なので、あえて自由記述欄を入れているって状況です。

ただ、障害関係は最近九州大学で『障害史研究』って雑誌ができましたから、これからだんだん盛んになってよい感じに変化するかも、と期待してるところですね。

第2回大会は大盛況、課題も

河原：第 2 回大会は、「アンチ学際」という趣旨を理解・共感してくれた方々がたくさん申し込んでくれて、嬉しかったですよね。

2023 年 9 月 1 日に同じく立命館の衣笠キャンパスで開催[12]。個人報告 9 名で、どれもすごく気合が入ったものだったと思います。参加申し込みは対面・Zoom 併せて110名。

田中：去年（第 1 回大会）の参加者もけっこうききに来てくれてね。わざわざ弘前からとか。

河原：来てくれた！というか、リピーターがめっちゃ多くて。出版社の方々もリピーターだし。対面会場の定員 40 名ちょっとなのに、20 人はいたんじゃないですか、第 1 回から続けてきてくれた人。特に声をおかけしたわけでもないのに来てくれたから嬉しいですよね。3 年目も来てくれたらいいね。

田中：9 名の報告者のうち、若山くんだけは事前に聞いていたんですけど、他の方は全部ガチ公募だったので、びっくりしましたね。

河原：ほぼ知らない人か、知り合いなんだけど特になんの連絡もなく申し込んでくれたりとかだったので。ともあれいろいろな人が関心を持ってくれ、申し込んでくれたのは本当にありがたいです。

猪原：報告者が想定よりかなり多かったので、第 2 回大会は急遽、会場をふたつに分けてしのぎました。

眞杉 ：2 会場に分かれていた時、休憩室の中継はどうしたんですか？（※眞杉はこのときオンライン参加）

河原：片方だけを中継しましたね。そこはしょうがなくて。1 つの会場に収まってた人数が 2 つの会場に分かれたので、2 会場に分かれた時は、対面会場は十分席が空いてるというか、若干片方寂しくなったところもあるんですけど、討論は非常に活発だったよね。

猪原：そうでしたね。うん。全然時間足りなかったです。

田中：そうそう、いっぱい出た。

河原：しかもなんか若い人がさ、積極的に元気よく。ありがたいことに修士の院生さんとかもね。バンバン質問してくれてびっくりしたね。あんまり偉い先生いないからのびのびしていたのかな？もしくは、全時代網羅なので、ガチガチの専門的質問だけじゃなく「素人質問」が許されそうな空気だったからかな？もしくはうちのような謎の団体に報告申し込みをする度胸があるからなのかな？とか（笑）

[12]「第 2 回研究大会プログラム」 https://x.gd/qcZJO

とにかく参加者も発表者もみんなやる気があって、大変良かったんじゃないないでしょうか。今年もそんな感じで参加してくれるとありがたいですね。

田中：あと、懇親会参加率がかなり高かった。

河原：第 1 回のときもだけど、第 2 回も対面参加者の6～7割くらいが参加してくれたような。うれしいね～。

田中：第 3 回大会は対面参加枠をもう少し増やせればいいんだけどね。

猪原：結局ネックは会場のキャパシティよりも人手が足りないことなので、どうしてもこれ以上は増やせないですね。

河原：困ったことにね。うちは独自コンセプトの学会ですから、興味を持ってくれた方にはぜひお会いししたいし、発表もぜひ聞きたいので、申し込んでくれた人には極力報告してもらいたいんですよね。ポスター発表とかも取り入れてみる？

寺澤：テーマとか時代が近い報告は、例えば40分の申し込みを 20 分にしてもらって、パネルを運営側で組むっていうのはどうですか。パネルで 20 分だったらできますよとか、そういう提案をする。

猪原：運営側がパネルを斡旋するというのは、あまり聞いたことないですけど。

河原：いや、あるある。国際会議だと、発表スケジュールがパネルベースで組まれていることが多いので、個人報告で申し込んでも知らない人とセットにされて、なんとなくタイトルが付けられて同じ枠で発表するとかある。発表時間が 20 分とかだから、パネルに組み込めるんだよね。寺澤案、いいかもね。

寺澤：あと、第 2 回大会では、教室の定員の関係で、対面参加の人数を制限しなきゃいけなかったので、対面で参加したかったけどオンラインになってしまったっていうケースがありましたね。第 3 回はそこをちょっとどうにかして、例えばさっき出てたように 控え室でも見れるようになってるので、対面で募集する人数をもうちょっと増やしてもいいのかなと。会場がいっぱいになっても、一応休憩室できくこともできますし、質疑の時だけその教室に来てっていうこともできると思うので。
もう少しこう、対面の柔軟性を持たせてもいいのかなと。

4. 活動資金と運営体制

会費を運営資金にしない

河原：うちは学会を名乗ってるけど、実は学会員を募集してないんですよね。だから学会ではないのかもしれないけど、九州史学会とかも現在会員制度をとっていないみたいで、いちおうありなのかなと思っています。
会員を募って会費を取ると運営費は出るのでしょうけど、省エネ運営ができなくなってしまうのでやらないことにしたんですよね。会費を取ると会計をきちんとして、きちんと総会開催して報告しなきゃいけなくなる。その手間はさけないので、学会費を運営資金にはしないことにしました。基本的に会員の手弁当で運営しています。

田中：個人の研究費が使える部分もあり、その場合は使って。紙冊子の印刷などは個人研究費などを使ってやっていますね。あと、若干の寄付もね。

河原：そうそう。うちは公式サイトに一応寄付窓口を設置しているんですが、そこから寄付をしてくださる方がいてね。毎年して下さる方もいてありがたい限りです。

田中：年会費のつもりでって言ってくれた人もいて。

河原：最近はクラウドファンディングで運営費を集めるという手もあるけど、クラファンサイトって手数料がえぐいので極力使いたくないんですよ。17%とか20%とか。アダルトサイトかよと思う。あと、リターンや収支報告を準備する手間が割けない。なので、公式サイトに寄付窓口をつける形にしました。本当にただの善意の寄付だけを受け付けています、という感じですね。リターンもないのに、寄付していただいている方には本当に感謝しています。

田中：ただ、会員制度を設けないと学会という感じはしないし、拡がっていかないかもしれないので、それは今後

の課題だね。会費ゼロで会員だけ募集することも考えています。

メインは Line グループ

猪原：編集委員会などは Zoom でやっていて、それ以外の日常的な事務連絡は基本的に Line グループを使ってますね。

河原：最初は Slack を併用してたんだけど、なんとなく使わなくなっちゃいましたね。

田中：Line は情報を後から確認したりするのには不向きなんですけど、既読がつくし、スタンプで返信できると楽なのでまあいいかって。

河原：多少雑談もしつつ、ゆるっとやってますね。といってもこれはかなり内輪向けのやり方ではあると思うので、新しく委員が増えることがあればたらもう少し考えないといけません。
ただ、今かなり省エネで運営できているのは、少人数なので合意形成がしやすいのが大きいということも確かです。

SNS の使い方

猪原：あと、多分変わってるところと言えば、さっきもちょっと出ましたけど大会の参加者の募集を X（旧 Twitter）でかけたところでしょうか。説明会をスペースでやったり。

田中：そういえばスペースやったね。それを聞いた人が大会に申し込んでくれたので、やってよかった。

河原：現状、まだまだ「謎の団体」なので、スペース説明会は今年もやってもいいかもしれないね。

田中：SNS は活用してるけど、学会の SNS アカウントは作ってないんですよね。

河原：まあ作ってもいいんだけど、年に数回しか広報することがないから、育てるのが難しい。

寺澤：フォロワー数 45 とかだったら、むしろちょっと恥ずかしいから。逆に、この団体大丈夫？ってなりそう。

河原：なりそう…。今やっているのはジャーナル刊行や大会開催、報告者募集などの際にお知らせメールを配信するメーリングリストですけど、年に数回しかお知らせしないのでこれくらいでいいのかなと思います。あと、公式サイトや ML 管理、メール対応、チラシ作成などは、現状私がほぼ全部担当しているので、少しの手間も省きたい（笑）。まあ公式サイトとかも、極力手間のかからない様シンプルに作ったのでそんなに手間はかかってませんけど。メール対応も、「72 時間以内に返信します」って断って、かなり余裕をもたせているし。

猪原：実質的な問い合わせ窓口は X（旧 twitter）になっているところもありますね。

河原：返事が簡単なのでこちらも楽だったりするしね。私と猪原、田中が X（旧 Twitter）にはいますから、DM とかで編集委員に問い合わせてもらったり、リプで聞いていただいたりするのも全然大丈夫です。

田中：ML の申し込みフォームには、「本会のことをどうやって知りましたか？」というアンケートを設けているのですが、その回答をみると、友人・知人から聞いた、という答えもけっこうあります。現状、X と Facebook の、委員の個人アカウントと、口コミ、ML で、それなりに宣伝できているのかなと。

猪原：運営体制としては、大会の時やっぱり人手がもう少し欲しいですね。

河原：第 1 回は、用心してアルバイトを 2 名雇ったんだけど、2 回の時は、いけるかなと思って雇わなかったんですよね。そしたら眞杉さんの就職が急に決まって韓国に行っちゃったから、当日来れなくなっちゃって。それで、かなり少ない人員で運営することになりちょっと大変だった。

田中：今年はバイトを雇おう。

5. 今後の展望

表紙は 12 年分ある

河原:『Antitled』および友の会は、委員が全員研究職に就職するまではやろう、とまあ半ば冗談で言ってました。結局この3年で田中・眞杉が就職したので、来年・再来年くらいで全員就職できたりして…という希望的観測を私は持っています(笑)。じゃあ『Antitled』もあと2年くらいで終わるのかというと、さすがにそれはちょっともったいない気がして。幸い『Antitled』の表紙を作ってもらった時、デザイナーさんが月刊誌だと勘違いして12号分作ってくれたんですよね。だから12年分ある。なんで12年続けられたらいいね、というような話はしてますよね。

田中:12 年で1期ということで。

河原:雑誌に関しては粛々と出していくわけですが、大会はどうでしょうか。皆さん、今後やってみたいこととかありますか?

田中:第3号に論文を書いてくれた若山くんが、彼が集めている牛王宝印[13]文書の展示をしたいって言ってました。

眞杉:つまり文化財の展示、もしくはいわゆる文書見学会[14]ということですかね。でもそれ、監視員がいるのでは。

田中:いないとまずいね。だから大会の最中に時間を設けてやるとかかな。展示会や見学会を行うというのもありですね。

猪原 :先ほどポスター発表の話出ましたけど、ポスター展示みたいに、休憩室に抜き刷りを配りたい人に集まってもらうとか。

河原:名刺交換会ならぬ、抜き刷り交換会みたいな?楽しいかもね。
そういえば、今すごく流行っているイメージのある文学フリマみたいに、歴史関係の同人誌とか売りたい人がきてくれないかなーってちょっと思うな。近現代だと在野の収集家たちすごいもん。
…なんか色々夢は広がりますが、人手と省エネ運営との兼ね合いですね。

田中:手伝ってもいいよ、という方がいたらぜひご連絡ください!

河原:なにせこっちからは誘いにくいんだよね(笑)。出来立ての怪しい団体なので入ってもメリットが保証できないし。

猪原:現状は立命出身者で構成されている小グループなんで、立命以外の人は相当入りずらいですよね…

河原:そんなことは気にせず、あえて空気を読まず、ずけずけ入ってきてくれるような方がいればありがたいです!

もっと異分野交流を

河原:「正統」歴史研究とか標榜しちゃってるから無理だと思うけど、個人的には歴史社会学系の研究者が発表してくれないかなーって思っているんです。私は日本史学者にしては、社会学業界がどんなところが理解してるほうだと思うんだけど、ほとんどの人はほぼ理解してなさそうなので、ちゃんと異文化交流した方がいいと思うんです。現状、お互いにそんなに相手を知ってるわけでもないのになんとなく想像で仲悪いから(笑)。

田中:社会学以外でもなんでも。美術史、考古学、文学とか。

河原:うん、なんでもいい。色々分野の違うひとと会ったりするほうが、若手の場合はキャリアとかも柔軟に考えられると思います。研究界隈の SNS 発言を眺めていると、本当に特定の業界、下手すると特定の大学内の慣習を、すべての人文学業界に共通の問題だと思い込んでいる人が多すぎると感じています。苦しんでいる人も、たぶん異分野を知ったり、所属する集団を増やしたりするだけでけっこう楽になる可能性あるよ、っていつも思うんで。

猪原:海外からだったら、オンライン発表でもいいってこと

---

[13] ごおうほういん。厄除けの札。中近世においては、神仏に願い事を告げる起請文の料紙として用いられた。
[14] 通常非公開の古文書など文化財を限定的に公開して見学する会のこと。遺跡見学会と同様に、学会のエクスカーションとしてしばしば開催される。

にしましたよね。

河原：そうですね。この場に許（智香）さんはいませんが、今は眞杉さんも釜山にいるし、海外からの参加も大歓迎ですよね。

眞杉：うちにも院生がいるらしいので、そのうちぜひ。オンラインもありがたいですが、もしかしたら、日本旅行を兼ねて、っていうのもありかもしれない。

寺澤：今後は、異分野の人も積極的に呼びこんで、若手の交流の場にもなれば良いと思いますし、特に研究大会はそういう場にしていければいいですね。なので、これを見た**異分野の人はぜひ報告申し込み・投稿をしてください。そして、みなさま、今年の第3回大会もよろしくお願いします！**